

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ことばをくらべる：言語学における比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊澤, 律子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001074

ことばをくらべる

— 言語学における比較 —

菊澤 律子

国立民族学博物館先端人類科学研究部

1 はじめに

文化や宗教と違ってことばは比べやすい。外国語を学習してある単語が日本語に似ている、と思ったり、発音は似ているのに意味が違うと感じたりした経験は誰にでも多かれ少なかれあるものだと思う。この似ているとか違うという評価そのものがすでに、なんらかの比較を前提としてなりたっている。

現代言語学は、そんな誰でも経験したことのある比較にはじまった。18世紀末にラテン語、ギリシャ語、そしてサンスクリット語の語彙が偶然の一致とは思えないほど「似ている」(表1)ことに気づき、これらの言語が「ある共通の源から発したものと信ぜずにはいられない」という指摘をしたのはイギリス人のウィリアム・ジョーンズ卿 (Sir William Jones) である。ことばを対象とした研究がまだ文献学 (Philology) に限られていた時代のことであった。後にインド・ヨーロッパ語族と呼ばれるジョーンズの仮説は約一世紀をかけて検証されるが (風間 1978), その過程で言語を比較して系統関係を解明する研究分野が発達し、比較 (歴史) 言語学と呼ばれるようになった。その後、ことばを対象とした学問は言語の諸側面を扱うべく発展して言語学となり裾野を広げていくことになる。それにつれて、ことばの研究における比較のもつ意味もさまざまになった。

本稿では、誰もが経験したことのある言葉の「似ている」・「違う」から出発し、言語学における比較のありかたとその問題点のいくつかを示してみることにする。

2 外国語学習における「似ている」・「違う」

新しい言葉を学ぶとき、似ているとか違うと感じるその中味は何なのだろうか。

単語の場合、それは語形と意味である。たとえば、淡水貝のことをフィジー語ではカイと呼ぶ。「あっ、日本語と似ているな」と思う。日本語の貝とフィジー語のカイは発音がほぼ同じで意味も貝一般と淡水貝というように共通点が大きいから、似ているという印象を受けることになる。語形が同じで意味が違う場合にも、無意識のうちになんらかの比較がおこなわれる。たとえば、スペイン語では家のことをカサという。あ、日本語と同じなのに意味が違う、と思う。同じ部分は語形である。違う部分は意味である。つ

表1 サンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語の語彙の対照リスト（風間 1978：14-15から引用）

	サンスクリット語	ギリシア語	ラテン語	
火	agni-		ignis	(露 ogoni)
ある	ásti (3人称単数)	estí	est	(英 is)
運ぶ	bhárāmi (1人称単数)	phéro	fero	(英 bear)
兄弟	bhrátar-	phrátēr-	frāter	(英 brother)
母	mātār-	mātēr- (方言形)	māter	(英 mother)
鼠	múṣ-	mūs-	mūs	(英 mouse)
雲	nábhās-	néphos	nebula	(独 Nebel)
夜	nákt-	núks	nox	(英 night)
名	nāman-	ónoma	nōmen	(英 name)
舟	nāu-	naūs	nāvis	
巢	nīḍā-		nīdus	(英 nest)
足	pád-	pós (方言形) (póda)	pēs (pedem)	(英 foot)
主(たる)	pāti-	pósis	potis	
父	pitār-	patēr	pater	(英 father)
新しい	nāva-	néos	novus	(英 new)
7	septá	heptá	septem	(英 seven)
うすい	tanú-	tanú- (合成語前文)	tenuis	(英 thin)
3	tráya-	treīs	trēs	(英 three)
男	vírā-		vir	
くびき	yugá-	zugón	jugum	(英 yoke)

まり私たちが外国語，より正確には外国語の単語を学習する場合，まず語形，次に意味といった順序で無意識のうちに母国語との比較がおこなわれるらしい。

文になると今度は違うレベルでの基準が適用される。文はまず「同じ意味を表すもの」という前提で与えられる。たとえば“I saw an extraordinary car this morning.”と「今朝，すごい車を見たよ。」という二つの文について，意味は対応することが前提，音の方は通常除外され，ここで比較の対象となるのは語順である。英語は主語 (I)・動詞 (saw)・目的語 (an extraordinary car)，対する日本語の文には英語の主語 (I)にあたるものはなく，目的語 (すごい車)・動詞 (見たよ) という語順になっていて，「あっ，違う」となる。逆に，文をみて「日本語と似ている」という感想が聞かれるのは，ヒンディー語や韓国語のように日本語と語順が似ている場合である。単語の場合には語形と意味，文の場合には単語の順序が無意識のうちに比較対象となるらしい。

ここで，これらの要素が無意識のうちに比較の対象となるには前提条件があることを指摘しておきたい。それは，情報が入ってくる段階ですでに対象がカテゴリー化されているということである。単語なら単語，文なら文のペアとして情報が入ってくる，つまり，同等とみなされる単位で目の前にあらわれる。だからこそ私たちは，似ているとか違うという判断を下しながら効率よく新しい言語を身につけていくことができる。

3 比較ができるもの、できないもの

単語や文といった単位を離れて言語と言語の比較ということになると、まったく話がかわってしまう。言語は抽象的概念の総体であり、そのまま比べることはできない。マラガシ語（マダガスカル）の研究をしている私はよく「マラガシ語は日本語に似ているのですか、英語に似ているのですか」という質問を受ける。この場合には、「発音でしたら日本語のように音節が母音で終わるので日本人には発音はしやすいですよ」とか、「語順でしたら日本語とも英語ともずいぶん違うんですよ」などと答えることにしている。マラガシ語という抽象的な総体のなかの発音だとか語順という具体的な要素に焦点をあて対象を限定することではじめて、日本語や英語における同等の要素との比較が可能になるからである。

一般的にはこのような答え方で満足してもらえることが多いが、本格的に言語の研究をしようとする場合には、語順ひとつとっても実際にはそんなに簡単に比べられるわけではない。先に英語と日本語では語順が違うと書いたが、かわりに「私たちの先生は男前よ。」“Our teacher is nice looking.”という文をとれば、「私たちの先生／Our teacher」, 「は／is」, 「男前／nice looking」と、語順はほとんど変わらない。このような文だって同じくらいよく使うのに、なぜ英語と日本語は語順が違うと言ってしまうのか。

さらに、ひとつの言語のなかには異なる文のパターンがあるのが普通で、そのなかのどれをとるのか、比較する対象となる言語のなかの、こちらも複数あるパターンのどれを同等の要素とするのかを決めるのも難しい。「今朝、すごい車を見たよ。」に対する文として、文脈によっては“An extraordinary car was seen (on the street) this morning.”のほうが正しい訳になるのになぜ、もう一方だけが比較の対象となるのか。だから簡単に語順がSVO（主語・動詞・目的語）だとかSOV（主語・目的語・動詞）だと言っても、実際にはそれぞれの言語内のどれを標準とするかについての合意があり、諸言語を通して適用できる基準がない限り比較はできないということになる。そしてこれは、そのまま言語類型論という研究分野における問題点であり難しさともなっている。

言語類型論ではパターンを抽出し、それにしたがって言語を比較分類しようとする。分類するためには基準が必要である。ところが分類することが目的になってしまうと、この基準の設定そのものが難しくなる。池田（1992）が生物分類を例にして示すように、分類の基準となり得る要素は言語が対象の場合でもひとつとおりでないからである。

さらに語順の例についていえば、文の構成要素それぞれの性質が言語ごとに異なっている可能性があることで事態はさらに複雑になる。たとえば、「主語」という名称で呼ばれる名詞は、主格（「～は」）であることが一般的であるが、言語によっては与格（「～に」）である場合もある（cf. Bhaskararao 2001）。たとえば、「ジョンはその本を忘れた」というのにバスク語では“Joni liburua ahaztu zaio.”（Joni ジョンに・liburua 本が・zhaztu

zaio 忘れた) という言い方をする。主格と与格は文法上のふるまいが違うから、これらを主語という名称の下でひとくりにすると、文レベルでの比較においては問題が出ることになる。

このように、言語Aで主語とよばれるものと言語Bの主語の実態が必ずしも同じでないならば、主語や目的語といった内容が異なる(可能性がある)ものの位置関係を比べて分類すること自体の意義が問われることになってしまう。

4 素性の束による比較・対象をしぼった比較

それでは、それぞれの用語を定義すればよい。ところがあらゆる言語に一貫して通用する定義というのは、できそうでいて実はなかなか難しい。

主語についていえば、たとえば、素性の束を用いることで主語を定義しようとした試みがある(Keenan 1976)。主語と呼ばれるものによくみられる素性(独立した存在物を示す、再帰形や代名詞との呼応関係をつかさどる、動詞の一致をつかさどる、無標の文においてトピックを示す、etc.)を列挙し、このなかの要素をもっとも多く持つものを主語と定めるといった方法である。この場合、各要素の性質の判定はスカラー的(主語性が強い弱い)であり、主語は同一言語の中の他の名詞句との比較のうえで相対的に決まる。

この方法は、各言語における主語を決めなくてはならないとしたら判断の基準にはなるし、主語と呼ばれるものの性質の言語間の類似性を比べるには有効である。ただし、性質が均質でないものを主語というひとつの名称の下に並べていることには変わりなく、主語を含む構文の比較などといったより広い文脈においては本質的な問題解決にはならない。

一方で、主語という定義の曖昧な用語の使用を避け、対象を絞って記述するという立場もある。たとえば主格という格標示、主題を示す要素、さらに、意味的に動作主をあらわす名詞句、関係詞の先行詞となるもの、などのうちのどれかに対象を限定し比較するというものである。

もちろん、これらの用語の定義にも問題がないわけではないが、対象となる要素が格標示なら格標示、主題なら主題というようにある程度均質的になり、文のようなより大きな単位での比較につなげることも可能となる。理論言語学や記述言語学の分野において、主語を定義しようとするよりも対象をしぼったアプローチをとる傾向がみられるようになってきたのは、このような理由にもとづくものであると考えられる。

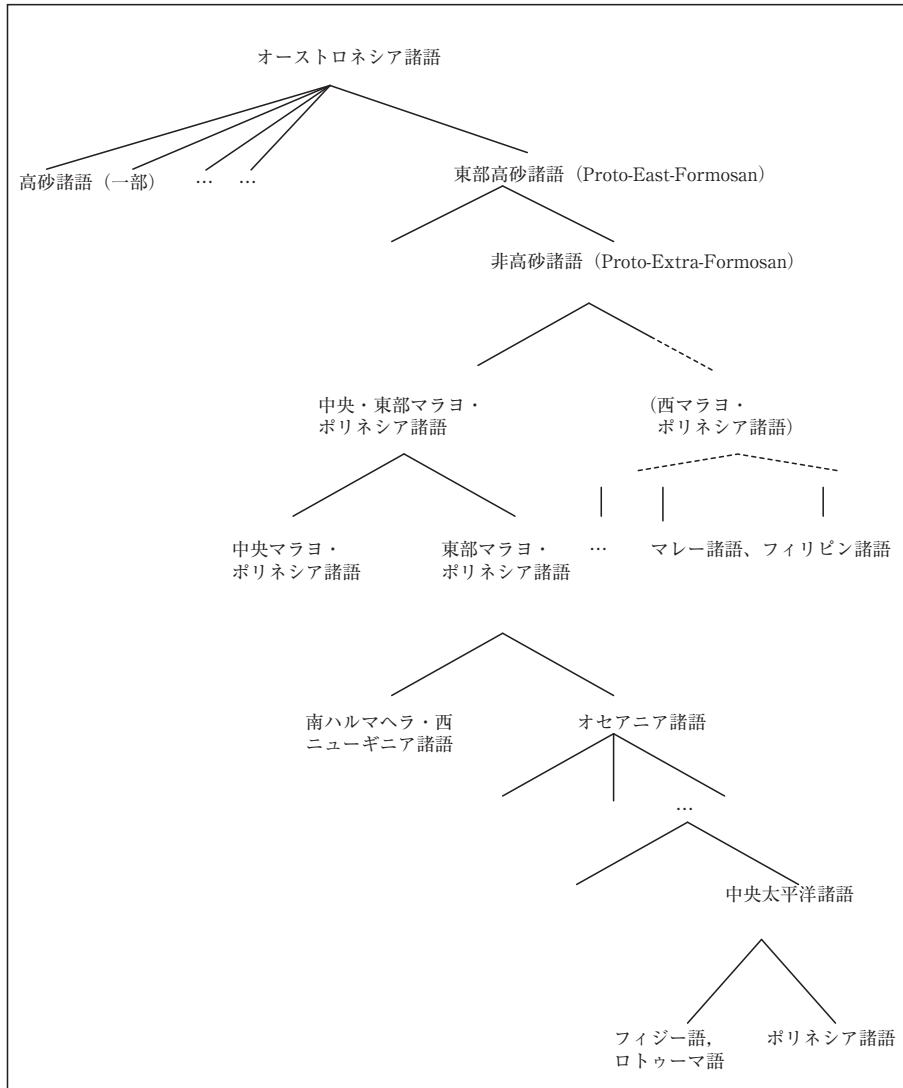


図1 オーストロネシア諸語の系統分類図

5 記述言語学と比較

資料によって用語の定義が異なる背景には、言語の記述の方法の時代による変化がある。ラテン語文法や国文法概念がそのままあてはめられた初期の記述方法に対し、20世紀前半には各言語固有の特徴に関心が向くようになり「話者の内面的な基準に基づいた」記述をすることに重きがおかれた。いわゆるイーミック (emic) 的なアプローチである。これに対して続く二十世紀後半には、言語の普遍性に関心がもたれはじめ、諸言

語を共通の定義や用語を用いて記述しようというエティック (etic) 的なアプローチがみられるようになった。

比較という観点からみたこのふたつの立場のもっとも大きな違いは、言語の記述における立場として他の言語との比較を前提とするかしないかという点である。前者の立場に立つものは、他の言語に有効な概念をあてはめることは対象言語特有の現象の正確な記述につながらないとする。ここには、対象だけを純粹に観察すれば客観的な記述ができる、という前提がある。これに対し、実際の言語の記述において既存の概念にとらわれず白紙の上に情報を並べ分析することが可能だろうか、という疑問がもたれることになる。外国語学習のときには母語との比較が自動的に行われることはすでに述べた。同様に、新しい言語を記述しようとするときに、自分の母語や既習言語の影響を避けることは難しい。他言語との比較を否定することは、この無意識の比較を無視し放置する結果になるのではないか。共通の定義をあてはめることは、逆にこれを意図的にコントロールすることにはかならない。

60年代以降アメリカで主流になった理論言語学においては、まず諸言語に共通に適用できるという前提のもとに成り立つ理論的な枠組みが存在し、それが実際の言語にあてはまるかあてはまらないか、を検証する形で言語の分析が進められる。したがって理論言語学の一側面として、それまでイーミック的であった記述言語学のエティック的な視点をもちこんだという指摘をすることが可能である。ただし、その出発点が記述を目的としたものではないため用いられる定義が必ずしも言語の記述に有効ではないこと、また理論ごとに用語が異なるなど負の側面もあり、理論言語学と記述言語学の間で建設的な対話が成り立つためにはまだ少し時間がかかりそうだ。

6 比較が可能である条件

このように、「似ている」にはじまった現代言語学はアプローチの仕方を変えながら現在に至っているが、その発端となった比較言語学もまた独自に発展を続けてきた。現在ではさまざまな系統の言語が比較研究の対象になっており、オーストロネシア諸語のように、近年まで書記法がなく記録のない言語の過去をさかのぼることも可能になっている (図1)。この、比較そのものが前提となっている研究分野において方法論が確立している部分とそうでない部分を比べてみると、言語の比較のために必要な条件がよくわかって面白い。

まず、方法論がよく確立しているのは語彙の比較と音対応である。この背景には、①対応する単位がはっきりしていて比較のための対応関係が特定しやすく、②記述のための手法が確立している、という事実がある。まず、語彙、あるいは単語は単位としては比較的はっきりしている。次に、それを構成する音は通常、子音と母音というこれもま

た決まった単位の連続で示されるから、どれがどれに対応するのかを特定することが可能である。さらにこれらの音は、IPA（国際音声字母, International Phonetic Alphabet）という共通のシステムによって記述される。正書法が違っていても、IPAで [b] と記述してあれば（その中で幅はあるものの）「有声両唇破裂音」であるという共通の約束事がある。この分野では比較に適さないケース（同源語であるとみなされないケース）を除外できるということが、いかに比較の対象と目的がはっきりしているかを示している。

一方、意味や文法構造の比較の場合にはこうはいかない。ここでは、①比較のための単位もしくは対象を限定することが難しく、②通言語的に一貫してつかえる記述の手法が確立していない。意味の比較についていえば、そもそも通言語的に意味を体系的に記述できる方法が共有されていない。文法事項については、すでに言語類型論や記述言語学の問題点として簡単に述べた内容に加え、ひとつの文法事象に複数の要素が関わってくることが多いため対象が限定されにくいことを指摘しておきたい。つまり、比較が可能となるためには対応関係が特定でき、かつその記述方法が一貫していなくてはならない。近年、比較言語学ではこのような文法の諸相の発展に関する関心が高まっており、その方法論の確立に取り組む研究が増えてきている。

それでは文法的な要素はまったく比較が不可能なのか、というとそういうわけではない。比較言語学が同じ系統に属する諸言語の比較を行うのに対し、系統関係のあるなしに関わらず、ふたつ（以上）の言語の比較をする分野を対照言語学と呼ぶが、ここでは文法事項も、発音や語彙の比較と同様、いやそれ以上に、よくみられる比較の対象となっている。ちなみに『対照言語学の新展開』という本に納められた論文のタイトルの中からわかりやすいものを引用すると、「COMEとクルの意味拡張における到達点の違い」、「カバンパンガン語と日本語の他動構文」、「日韓語対照研究による敬語の文法化に関する一考察」と、扱われる言語数が少なく、かつ内容が特定の文法現象に限定されている。文法的な内容でも対象を限定し定義をはっきりしさえれば、異なる言語間での比較は充分可能であることがわかる。先に述べた、マラガシ語と日本語や英語を比べることはできないが、対象をしぼってその類似性や違いを述べることは可能である、という点にもどってくることになる。また、比較の対象を少数の言語にしぼることで、記述の方法にずれがあっても修正することが可能となる。

7 さいごに

言語は、音（音声言語）や身振り（手話）、つまり時間軸に沿って形を変える物理的な存在に、意味や文法条件や語用論的要素などの抽象的な要素が絡みあって成り立っている。発音や語彙など物理的に存在する部分は、切り出しやすく比較の対象にもなりやすい。一方、形式化しにくい文法現象や、抽象的な意味や語用論的側面は比較するのが難

しい。ただし、これらの内容についても対象を限定し、呼応関係を明白にすることで比較が可能になることを述べた。

言語学における比較の仕方や目的は一樣ではないが、どのような場合にも比較が成立するためには、まず呼応するカテゴリーの特定が必要である。スペイン語のカサが日本語と違うと感じるのは、単語という同じカテゴリーに属していて、かつ同じ語形を認識できるからである。韓国の金属性でできた箸が日本のものと違うと感じるのは、対象が日本の「箸」と同じカテゴリーに属するという認識あつてのことである。共通部分があるからこそ違う点を判断できる。これは言語に限らず比較を考えるうえでは重要な観点であろう。

文 献

池田清彦

1992 『分類という思想』新潮社。

風間喜代三

1978 『言語学の誕生——比較言語学小史』岩波新書。

佐藤滋・堀江薫・中村渉編

2004 『対照言語学の展開』ひつじ書房。

Bhaskararao, Peri (ed.)

2001 International Symposium on Non-Nominative Subjects: Working Papers. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA).

Keenan, Edward

1976 Towards a Universal Definition of “Subject”. In Charles N. Li (ed.) Subject and Topic. New York: Academic Press. pp.247-302.